

## 東北北部における 後北C<sub>2</sub>・D式期の交流・移住・文化変容にかかわる検討

佐藤 由紀男\*

### はじめに

東北北部の弥生時代から古墳時代（並行期を含む）の北海道は続縄文時代である。両者間では継続した交流が確認されるが、なかでも弥生時代後期後葉・終末期並行期から古墳時代前期並行期の東北北部は、北海道の文化的影響が顕著であったと理解する研究者が多い。事実、この時期の北海道の続縄文土器である後北C<sub>2</sub>・D式は、それ以前の土器とは異なり東北北部での出土例が多く、墓制についても土坑内に袋状のピットを有したり、柱穴状のピットを有したりする北海道と共通する事例が確認される。こうした様相の東北北部の弥生時代後期後葉・終末期並行期から古墳時代前期並行期（後北C<sub>2</sub>・D式期）を続縄文時代として理解する研究者も存在し、特に当該期の中でも後半の古墳時代前期並行期はその傾向が強い（藤沢2014など）。

筆者は当該期の東北北部の生業や北海道との交流、北海道からの人の移住にかかわる様相を整理し、当該期の東北北部を続縄文時代の時代概念の適用範囲とすることに疑問を呈し、再検討を促した（佐藤印刷中a・b）。しかし紙幅制限があり、こうした地域間の交流や人の移住、そしてその結果である文化変容や文化変換についての、他地域・他時期例との比較・検討を実施することができなかった。本論文ではこの点を行い、当該期の東北北部の理解を深めることを目的とする。

### 1、交流・移住・文化変容にかかわる東北北部の当該期の理解

筆者の当該期の理解は、佐藤（印刷中a・b）で示しているが、両論文ともに受理済みではあるものの刊行時期の詳細は未定であり、かつ本論文の刊行が先行するであろうから、まずは筆者の当該期の理解（一部追加事項を含む）を示しておく。

後北C<sub>2</sub>・D式は、赤穴式に先行する湯舟沢式とも接点をもつ可能性があるものの（佐藤・阿部2021）、確実に共伴関係にある東北北部の土器は弥生時代後期後葉・終末期並行の赤穴式と古墳時代前期並行の古式土器である。当該期を赤穴式と後北C<sub>2</sub>・D式とが共伴する前半期と古式土器と後北C<sub>2</sub>・D式が共伴する後半期に二分する。

当該期の理解の見直しのために、筆者が過去数年間にかかわった研究（主に設楽博己氏を代表者とする科研費（JSPS科研費16H01956）による研究）で明らかになった重要点は、赤穴式

---

\* 岩手大学教育学部考古学研究室

からはレプリカ法によってアワ・キビの雑穀が検出され(佐藤・工藤ほか2019)、東北北部製作の蓋然性の高い古式土師器からはイネが検出された(山下・太田ほか2017)ことである。さらに赤穴式の煮炊き用土器の容量は、植物質の食料では堅果類及びアワ・キビの雑穀類の検出比率の高い突帯紋系土器期(以下、突帯紋期と略す)の山陰と類似した大形・超大形土器の比率の高い組成であることも明らかになった(佐藤・工藤ほか2018)。前半期には堅果類も検出されている(岩手県岩泉町豊岡V遺跡例(岩泉町教委2006))。東北北部出土の後北C<sub>2</sub>・D式も赤穴式と同様の容量組成であり、それは小形・中小形土器の比率の高い北海道の後北C<sub>2</sub>・D式とは大きく異なる。赤穴式は堅果類の利用と雑穀栽培に適応した容量組成と理解され、東北北部の後北C<sub>2</sub>・D式からは雑穀類は検出されていないものの、同様と判断される。そして後半期には、それに稲作が加わった蓋然性が高い。北海道の当該期では穀物栽培は確認されないのであるから、生業が大きく異なる東北北部の当該期を北海道と同じく縄文時代の時代概念の適用範囲とすることは、見直しが必要である。また容量組成の違いにより、東北北部出土の後北C<sub>2</sub>・D式の多くが、北海道からの搬入品ではなく、東北北部でその機能・用途にあわせた容量で製作された土器であることも明確となった。

しかし前述のように、当該期の東北北部では北海道と共通する特徴をもつ土坑墓が確認されている(岩手県九戸村長興寺I遺跡(岩手県埋文2002))。また豊岡V遺跡では10軒の竪穴住居跡中1軒のみから赤穴式とともに後北C<sub>2</sub>・D式が出土したが、他の住居跡からの出土土器は赤穴式のみである。この後北C<sub>2</sub>・D式が東北北部での製作であることを前提とした時、両者が同じ生産体制で作られていれば、特定の住居跡に後北C<sub>2</sub>・D式の出土が限定される状況は極めて例外的と考えられる。したがって赤穴式と後北C<sub>2</sub>・D式はそれぞれ別の生産体制で作られていた蓋然性が高いであろう。なお出土土器の量的な面でも在来系の赤穴式が主体であり、豊岡V遺跡の報告書に掲載された土器点数における後北C<sub>2</sub>・D式の比率は6%程度(101点中6点)にすぎない。アワ・キビが検出された岩手県一戸町親久保II遺跡B調査区では、報告書(岩手県埋文1987)には87点の前半期の土器が掲載されているが、後北C<sub>2</sub>・D式は出土していない。これらのことから判断すれば、北海道から東北北部への移住者が存在した蓋然性は高そうであるが、その場合でも人数は僅かであったと考えられる。ちなみに北海道と共通点をもつ墓制は、後半期さらにそれ以降の古墳時代中期並行期にまで継続する(青森県七戸町猪ノ鼻(1)遺跡(青森県教委2021)、盛岡市薬師社脇遺跡(花井2002)など)。

墓制については、九州北部の灌漑稲作導入期である突帯紋期の佐賀県唐津市大友遺跡の第5次調査で検出された朝鮮半島系譜の支石墓出土人骨が、半島からの移住者ではなく九州北部の在来系の特徴をもつこと(中橋2001・2003、神澤・角田ほか2021)は広く知られており、墓の形態と埋葬者の系譜が必ずしも一致するとは限らない。また東北北部出土の後北C<sub>2</sub>・D式の多くは東北北部での製作と考えられるが、豊岡V遺跡例がそうであるのか否かを明確に判断することも難しい。もし搬入品であれば特定の住居跡からの出土を例外的とする必要はない。多くの識者が述べるように、物質文化の分布と文化集団・人間集団の分布とが対応するとは限らない(庄田2009など)ことには常に留意する必要はあるものの、大友遺跡の事例もその背景が明確に説明できているわけではない。本例の墓制の場合も、北海道からの移住者の存在を示す蓋然性は高いが、文化交流による墓制の受け入れである可能性も否定することはできない。

前半期の北海道では札幌市K135遺跡出土例(札幌市教委1987)のように、東北北部の湯舟沢式・赤穴式と共通点をもつ土器の出土が知られる。搬入品や模倣品の可能性の高い土器が北

海道・東北北部の双方で確認されるのである。それ以前にはこうした事例は明確ではないので、両者間の交流がこの時期に顕在化・活発化していることは間違いない。

後半期には在来系の土器型式である赤穴式は消滅し、仙台平野・新潟平野以南の系譜につながる古式土師器が波及する。一見、赤穴式が古式土師器に変換したかのように見えてしまうが、古式土師器は壺・甕・高坏・器台ほかの多器種で構成され、主に煮炊き用の甕・深鉢類で構成される赤穴式とは組成が異なり、また煮炊き用の甕の容量組成も大形・超大形の比率の高い赤穴式とは異なる。古式土師器は稲作を基盤とする生活様式・炊飯に適応した土器である。前述のように機能・用途的には赤穴式と東北北部の後北 C<sub>2</sub>・D 式は同様であることを鑑みれば、この時期に赤穴式は後北 C<sub>2</sub>・D 式に吸収されたと理解するのが妥当である。また論証は難しいことであるが、後北 C<sub>2</sub>・D 式の方が、在来系の湯舟沢式・赤穴式に比べて堅牢な土器が多い印象である。古式土師器は赤穴式とはまったく異なる機能・用途をもつ土器として、この時期に波及したのである。ちなみに後半期の東北北部の後北 C<sub>2</sub>・D 式では、北海道の後北 C<sub>2</sub>・D 式では顕在化していない台付の深鉢が確認されたり（猪ノ鼻(1)遺跡例）、紋様構成、調整手法などでも両者間の差異が拡大するので、北海道からの移住者の増加を想定することはできない。移住者の増加を背景として赤穴式を吸収したのではなく、後北 C<sub>2</sub>・D 式が東北北部の在出土器として定着したと理解する（木村 2011）のが妥当である。

前述したようにイネが検出された岩手県滝沢市仏沢Ⅲ遺跡の古式土師器を、報告者は器壁厚やハケ原体の幅の検討から、搬入品ではなく在地で製の作品と判断している（滝沢村埋文 2008）。青森県七戸町猪ノ鼻(1)遺跡出土の古式土師器には、他地域には類例の見出しがたい土器も存在する。東北北部出土の古式土師器の多くは、搬入品ではなく東北北部での製作品であった蓋然性が高い。東北北部出土の後北 C<sub>2</sub>・D 式と同様である。後半期の東北北部は北海道に系譜をもつ後北 C<sub>2</sub>・D 式が定着し、さらに仙台平野・新潟平野以南に系譜をもつ古式土師器が波及し、そして在来系の土器は消滅するという様相を呈す。ちなみに北海道の続縄文時代の生業は漁労の重要性が高いと考えられている（高瀬 2014 など）が、当該期の東北北部ではそのような兆候は確認されず、むしろ東北北部出土の後北 C<sub>2</sub>・D 式は東北北部の生業への適応化が想定されるのであるから、後北 C<sub>2</sub>・D 式の東北北部への波及・定着は、生業との関連は薄そうである。一方、古式土師器の波及は前述のように東北北部における再度の稲作の導入と密接にかかわる。当該期の東北北部の理解には古式土師器の分析も不可欠であるが、本論文ではまずは後北 C<sub>2</sub>・D 式の理解を深めることを一義とする。

なお東北北部への後北 C<sub>2</sub>・D 式の波及については、その要因を寒冷化・冷涼化による人の移住に求める考えもある（上野 1992 など）。しかし年輪酸素同位体比の変動から気候に関する情報のみを抽出するという信憑性の高い方法による分析では、当該期は寒冷・冷涼期と判断されるが、その開始は紀元前 1 世紀・弥生時代中期後葉～末（弥生Ⅳ期）である（中塚 2021、中塚・若林ほか編 2020、中塚・鎌谷ほか編 2021）ので、時期差が大きい。また、その要因を鉄器ほかの入手を目的とした仙台平野方面との交易とかかわる人の移住に求める考えもある（鈴木 2011）。しかし当該期を遡る後北 C<sub>1</sub> 式並行期に、現在の新潟県域との鉄器入手とかかわる交易が確認されており、それは当該期まで継続する（石川 2013、滝沢 2014・15）。さらに仙台平野の土器が関東方面ほかの影響で古式土師器に変換し、それらの地域との交易・流通関係も変化したと考えられるのは、後北 C<sub>2</sub>・D 式の東北北部への波及よりも時期的に新しい（広域編年は木村・鈴木 2011、井上・早野 2013 による）。後北 C<sub>2</sub>・D 式土器の東北北部での定着が、

気候や交易と関連する可能性までは否定できないが、波及の要因をそれらに求めることは首肯しがたい。東北北部への後北C<sub>2</sub>・D式の波及要因を的確に説明できる考え方は、現状では提示されていないのである。

後北C<sub>2</sub>・D式の東北北部への波及後の様相として、北海道との関連の深い遺物として取り上げられることが多いのは、皮革加工との関係が想定される黒耀石製の搔器・削器と方割石である(木村・鈴木2011など)。前半期かと推定される事例があるものの、顕在化するのの後半期以降であり、しかも盛期は古墳時代中期並行期である。青森県八戸市田向冷水遺跡や岩手県奥州市中半入遺跡は、レプリカ法の成果で稲作の実施が確実視される(太田・笠見ほか2019)が、この両遺跡で顕在化している点には注意が必要である。続縄文時代の北海道に系譜をもつ遺物であり、当然その文化とも関連するが、これらを北海道の文化の指標として特別視することは難しい。また後北C<sub>2</sub>・D式の波及期には顕在化していないのであるから、波及の要因との関係も薄いであろう。

当該期の北海道も東北北部も居住施設の検出例が少ないことで共通するが、北海道では竪穴住居による集落の検出例は知られていないが、東北北部では前述の豊岡V遺跡をはじめとして、複数の竪穴住居跡が確認された事例が知られている。また湯舟沢III遺跡(滝沢村教委1986)のVIIc・VIIIf竪穴住居跡出土土器が湯舟沢式のまとまった資料であるが、両住居跡からは弥生時代中期の土器も出土し、しかも床面出土であることが明確な土器は中期のみである。さらにこの2軒は、壁の内側に柱穴が連続する中期と同様の形態である。竪穴住居の時期は中期であり、その廃絶後のくぼ地利用が後期並行期である蓋然性が高い(佐藤・阿部2011)。赤穴式に先行する湯舟沢式期においても居住形態の様相は不明瞭な部分が多いのである。もともと大規模集落が確認されない東北北部の弥生時代中期以降の居住は散居形態であった蓋然性が高く、後期・終末期並行期のこうした様相はその延長での理解も可能である。当該期の東北北部で居住施設の検出例の少ないことを後北C<sub>2</sub>・D式期の北海道の様相と結びつけ、その文化的要素の波及として理解することは難しいであろう。

東北北部の後北C<sub>2</sub>・D式期の様相で本論文とかわる点をまとめると以下ようになる。

- 1、後北C<sub>2</sub>・D式の前半期に北海道と東北北部の相互交流は、それ以前と比較すれば活発化・顕在化し、北海道から東北北部への移住者の存在も想定される。移住はこうした交流の一環で行われ、移住者の数は僅かであった蓋然性が高い。ただし本論文で移住とのかかわりを想定した考古資料は、交流の活発化・顕在化によるいわゆる文化変容の結果である可能性も否定はできない。
- 2、移住の要因は生業との関連は薄く、また寒冷化や西方との鉄を中心とした交易との関連も直接的には想定しがたい。
- 3、後北C<sub>2</sub>・D式の後半期には、稲作・炊飯に適応した新たな機能・用途をもった古式土師器が東北北部に波及する。また在来系の赤穴式は後北C<sub>2</sub>・D式に吸収され、製作されなくなる。北海道系譜の後北C<sub>2</sub>・D式が赤穴式に替わって東北北部の在地土器として定着したと理解される。
- 4、東北北部の当該期の土器と墓制は北海道との共通性があるものの、穀物栽培(アワ・キビ・イネ)が確認される東北北部と確認されない北海道との生業の違いは大きい。当該期の東北北部を続縄文時代の北海道と同様の文化と見なすことは再検討が必要である。

## 2, 交流・移住・文化変容にかかわる他例との比較・検討

まずは朝鮮半島からの人の移住を契機としていた、九州北部における突帯紋期の灌漑稲作の導入に触れる。九州北部の突帯紋期には朝鮮半島から灌漑稲作技術とそれに付属する文化総体に精通した人が移住し、在来の人たちと同じ集落で共に生活＝「共生」することによって灌漑稲作が波及・定着したと考えられる。九州北部の中でも移住者の割合の高い現在の福岡県糸島市周辺の当該期の遺跡において、半島系土器の出土土器全体に占める比率は20%程度であるので、この程度の比率の移住者の存在が推定される（家根1993）。稲作が速やかに定着したことは、在来の突帯紋系の煮炊き用土器の容量が、半島の土器と近似する組成に急速に変化した（佐藤2000）ことから伺える。その一方、半島系の深鉢を基盤にわずかに口辺部が外反した板付祖型甕と呼ばれる土器が生み出され（家根1984）、半島とは異なる九州北部独自の板付式の甕へと繋がっていく。壺においても突帯紋期には半島の丹塗磨研壺と形態的に類似していたものが、やがて九州北部独自の形態へと変化し、板付 I 式の壺となる（端野2018）。なお板付 I 式期には、こうした板付 I 式と稲作・炊飯に適応化した在来系譜の突帯紋系の夜臼式が並存しているが、板付 II 式期に至ると夜臼式は板付式に吸収される。

ちなみに突帯紋期に半島からの移住者が存在したことは事実であるが、その逆は確認されない。半島からは突帯紋系土器の模倣品がわずかに確認されるのみ（端野2010など）であるから、両者間の相互の交流は認められるものの、半島から九州北部へという方向性が主流である。突帯紋期に先行する時期の九州北部と半島との交流は、黒川式期の北九州市貫川遺跡出土の半島からの搬入品の石庖丁（前田・武末1994）や、佐賀県唐津市高峰遺跡出土の半島からの搬入品の可能性がある孔列土器（片岡1999）が知られる程度である。黒川式期の交流は頻度が高いものとは考えられないが、突帯紋期の移住の前提としては重要視される。

この移住は当初から目的性をもっていったのか、それとも結果的に灌漑稲作の波及を担ったのかを明確に判断することは難しいが、移住当初から親密な関係を有して同一集落で「共生」していることや、在来の突帯紋系土器の稲作・炊飯への適応が急速であることなどを勘案すれば、九州北部側からの「招聘」的要素が強かったことが推測されるので、灌漑稲作の波及が当初からの目的であった蓋然性が高い。こうした移住では、移住後に移住先の在来系集団と移住者の故地との盛んな交流は不可欠とは考えられないので、半島からは突帯紋系土器の模倣品がわずかに出土するのみなのであろう。

こうした板付式土器の要素をもつ遠賀川系土器が伊勢湾周辺にまでやがて波及する。島根県出雲市原山遺跡は、山陰で遠賀川系土器を主体とする最古の遺跡である。そして在地の突帯紋系土器は出土しないことが大きな特徴である。出土した土器の特徴から、九州北部の板付 I b 式並行期に現在の山口県北西部である長門地域以西からの移住者によって営まれた集落と考えられる（濱田2021など）。原山遺跡の周辺には突帯紋系土器を使用する同時期の集落が並存しており、両者は「共存」の関係にある。原山遺跡からは出雲編年の I -1 様式から I -2 様式が出土しており、I -2 様式にいたると突帯紋系を主体とする遺跡からの遠賀川系土器の出土が確認される（濱田2021）。山陰では、原山遺跡の出現以前の突帯紋系土器からもイネ・アワ・キビがレプリカ法によって検出されている（濱田2019など）が、突帯紋系土器でイネの比率が増加するのは、この I -2 様式並行期の古海式からであり、煮炊き用土器の容量も稲作・炊飯に適応した組成に変化しはじめる（濱田2021, 佐藤印刷中 a）。そして I -3 様式期には遠賀川系

土器のみを製作・使用するようになる。九州北部と比較すれば土器の変容、稲作の導入は漸移的である。ちなみに原山遺跡の出現時には、前述のようにその生業活動領域内に突帯紋系土器を使用する集落が並存していたのであり、秋山(1995)が岡山平野において推定した(註1)、在来系の人たちの遠賀川系の集落形成の「容認」の具体例と考えられる(濱田2021)。「共存」という理解がふさわしい。

大阪平野における最古の遠賀川系土器が出土した遺跡は、寝屋川市讃良郡条里遺跡(大阪府文化財センター2009)である。自然流路の埋没痕跡である3-267・268溝からこの遠賀川系土器と突帯紋系土器の長原式が出土している。長原式は同遺跡での出土の90%程度がこの溝に集中するのに対し、遠賀川系は他の遺構からも出土することや、溝内での出土分布にも差がみられることから、両者が共伴であるのか否かは明確ではない。ただし、大阪平野の他の遺跡の検討(若林2002)を参照すれば、遠賀川系の波及時にその周辺に突帯紋系土器の長原式を使用する集団が並存していたことは間違いなさであろう。そして遠賀川系土器の波及以降に突帯紋系土器を主に使用した集落は激減し、やがて突帯紋系土器の製作は終了する(若林2002)。山陰と比較すれば急激な変化である。

讃良郡条里遺跡の遠賀川系の集団が営んだのは建物数棟からなる集落と推定され、土坑や土器焼成坑と推測される遺構なども検出された。焼成失敗土器も出土しているので、遠賀川系土器の製作が行われていたことは確実であろう。出土した遠賀川系の素地土としては、周辺の粘土が選択されているが、異質な胎土もあり、搬入土器が含まれていることも間違いない。大阪市長原遺跡から出土した土器棺として使用された遠賀川系土器の壺は、香川県坂出市下川津遺跡出土の遠賀川系土器の壺と形態・胎土が酷似することから、香川県方面からの搬入品と考えられており(信里2021)、また讃良郡条里遺跡からも香川県域原産のサヌカイトが出土することから、大阪平野の初期の遠賀川系土器使用者の故地を香川県方面に推定する研究者は多い。遠賀川系土器は斉一性が強いので、下川津遺跡出土の口頸境に突帯状段をもつ壺のように極めて特徴的な土器は故地の推定も容易であるが、それ以外の土器の故地の推定は難しい部分があるので、現在の香川県域以外からの移住も想定すべきかもしれない。九州北部などの遠隔地の土器は区分が可能であるから、いわゆる近隣地域からの移住である。こうした近隣地域をつなぐ形(リレー式)での土器や水稻農耕関連の文化要素の波及は、かねてから主張されていることである(下條1995など)。讃良郡条里遺跡における長原式を用いた集団との「共生」の可否は別としても、それなりの規模の集落を営むことができる遠賀川系土器を用いる集団が、長原式を用いる集団が居住する地域内(集落内の可能性もあり)、もしくは周辺に西方から移住してきた蓋然性は極めて高い。

3-267・268溝に限定した場合の遠賀川系と長原式の比率は報告書によるとほぼ同率であるが、集落全体では遠賀川系が65～70%程度を占める。煮炊き用土器の容量組成は、遠賀川系土器(39点)では2ℓ未満の小形が15%、2ℓ以上5ℓ未満の中小形が51%、5ℓ以上10ℓ未満の中形が26%、10ℓ以上20ℓ未満の大形が5%、20ℓ以上の超大形が3%であるのに対し、長原式は10点と母数が少ないものの、小形が10%、中小形が0%、中形が10%、大形が20%、超大形が60%という組成であり、佐藤(2000)で示した近畿の遠賀川系と長原式の組成の違いと同様である。讃良郡条里遺跡で実施されたレプリカ法の成果も、遠賀川系ではイネ15点、アワ1点、長原式ではアワ10点(設楽・守屋ほか2019)の検出と、その違いは大きい。両者の生業差は極めて大きく、「共生」であったとしても、遠賀川系からの影響はほぼ皆無と考えら

れる。讚良郡条里遺跡以外の長原式土器使用集団の様相も前述のように同様であり、遠賀川系の影響を受けないのであるから、この事例の移住は「招聘」よりも「容認」的と理解される。

大阪平野では、山陰の事例とは異なり、遠賀川系土器の影響と推定される突帯紋系土器の変化は確認されない。こうした遠賀川系の影響を受けない突帯紋系土器使用の集団が存在した一方では、森岡（1993）が設定する当該期の集落類型の E 型は、讚良郡条里遺跡のような集落の形成以降、突帯紋系土器を製作していた集団が、速やかに灌漑稲作を導入するために集落を移動させ、土器も遠賀川系を製作するようになった事例を想定している。遠賀川系集団の様相を目のあたりにした結果、文化内容を大きく変換させた集団が存在したり、灌漑稲作の本格的導入を意図して遠賀川系集団を「招聘」したりした集団も存在していたことが想定される。むしろこちらが大阪平野では主流であろう。これが遠賀川系土器の波及以降に、突帯紋系土器を主に使用した集落が激減する背景と考えられる。九州北部や山陰では、遠賀川系土器と同じ機能・用途に変化した突帯紋系土器はやがて遠賀川系土器に吸収されたと理解されるが、大阪平野では突帯紋系土器が遠賀川系土器に変換し、そして変換しなかった突帯紋系土器はやがて消滅したと理解される。変化は山陰の事例よりも急激となる。

豊川下流域の愛知県豊橋市白石遺跡では、遠賀川系土器を使用した集団の環濠集落が、在来の条痕紋系土器を使用した集団の集落内もしくは隣接地に営まれた事例が検出されている（豊橋市教委 1993）。環濠集落の規模は 2,500m<sup>2</sup>程度と推定されるので、遠賀川系土器期の環濠集落の事例から推定すれば、3～5軒程度の竪穴住居を営む小規模な集落が想定される（佐藤 2004）。両者は友好的な関係と推定されるので、移住は豊川下流域の条痕紋系の集団が遠賀川系の小集団を「招聘」した事例と理解される（佐藤 2004）。こうした遠賀川系集団の移住を契機として、在来の条痕紋系土器の煮炊き用土器の口辺部の外反化や容量組成の変化が確認される。稲作・炊飯への適応化にかかわる変化である。遠賀川系土器でも、口辺部の特徴などに条痕紋系の要素が確認されるので、条痕紋系の影響を受けた遠賀川系が豊川下流域で製作されていたと考えられる（佐藤 2004）が、やがて遠賀川系は製作されなくなる。在来の条痕紋系が遠賀川系と同様の機能・用途を担うようになったためであろう。なお豊川下流域では、生業については移住者からの影響が想定されるが、集落景観や墓制ほかの文化要素については、遠賀川系との共通点は確認できない。生業にかかわる要素のみを受け入れたのであり、招聘の目的が当初からそうであった蓋然性が高い。山陰とも、大阪平野とも様相が異なる。遠賀川系の故地については、佐藤（2004）では伊勢湾を挟んだ対岸の伊勢湾西岸地域（現在の三重県域）を推定したが、伊勢湾西岸地域に限定することは難しそうである（註 2）。

神奈川県小田原市中里遺跡は、足柄平野に営まれた弥生時代中期中葉（弥生Ⅲ期）の集落である。関東ではこの時期には、煮炊き用土器の容量組成が稲作・炊飯に適応化している（佐藤 1999）。中里遺跡からは多器種に及ぶ東部瀬戸内系譜の土器が出土しており、彼の地からの移住者の存在が想定される（佐藤 2020 など）。東部瀬戸内系譜の土器の比率は全土器の 4%弱とされ（玉川文化財研究所 2015）、出土が集中する地点も確認され、また搬入品の蓋然性の高い土器と中里遺跡での製作の蓋然性の高い土器の両者が確認される（長友 2021）。中里遺跡は調査面積も広く出土土器も多いことから注目されているが、当該期の南関東では東部瀬戸内などの遠隔地の土器の出土例が他にも確認される点（石川 2021a など）は重要である。南関東ではこの時期に生業のみならず、集落景観、墓制ほか大きく変化する（石川 2021a・b）。中里遺跡からは東部瀬戸内系譜の土器としては、凹線紋系土器の甕も出土しているので、東部瀬戸内

との継続した交流が確認される(長友2021)が、多器種が出土するのは中期中葉(弥生Ⅲ期)の前半に限られるため、移住はこの時期に限定できそうである。杉山(2014)が想定する、熊野灘・遠州灘などを經由した準構造船による海上交通での交流は継続するのである。なお南関東の在来系土器の東部瀬戸内での出土は定かでないで、東部瀬戸内から南関東へという方向が交流の主流である。他の文化要素に比べて、東部瀬戸内系譜の土器の南関東在来の土器への影響は、前述の容量組成以外では、大形の広口壺という新たな器形の採用程度と僅かである。在来集団と移住小集団は「共生」し、様々な文化要素も受け入れているのであるから、「招聘」の要素が強い移住と推定されるが、当該期を遡る南関東と瀬戸内東部との直接的な交流は不分明である。

凹線紋系土器は、弥生時代中期中葉の中部瀬戸内から山陰で成立して各地に波及する、凹線紋という紋様と内面ケズリ技法を共通項とした土器群である。波及の当初はそれぞれの地域の在来の土器と共存しているが、やがて凹線紋系が主体となる。波及は貫入的であるが、集落内において在来系と凹線紋系が排他的に扱われることは例外的である。瀬戸内から近畿での凹線紋系土器の波及は、土器製作単位を基本とした密接な地域間交流とかかわり、集約的な土器生産体制の受容・移行をその背景としていたと理解される(信里2014)。人の移住や他の文化要素の波及との関連は薄く、あくまで土器の波及としての理解が可能である。土器の分布圏が拡大する背景の具体的理解として注目される。

濃尾平野への凹線紋系土器の波及の様相について広域での検討を行った深澤(1994)は、工具の持ち替えという変化が地域を少しずつかえて連鎖反動的に起こるといふ、日常的な近隣の地域間の交流が土器の広域分布・分布圏の拡大の背景にあったことを指摘する。そして濃尾平野への凹線紋系土器の波及が、近江地方を介した日本海側と深く関連することを明らかにした。これも人の移住とは関係しない地域間の交流によって、土器の分布圏の拡大を説明した具体例である。また土器の分布圏の拡大を人の移住・移動などと安易に結びつける発想への警鐘(石黒2014)でもある。

ちなみに凹線紋系土器の特徴である甕での内面ケズリの多用による煮沸機能の強化は、土器の機能・用途の側面からは、凹線紋系土器が各地で受容される要因として注目される。機能が優れていたために受容されたと考えるのである。

なおこの時期の濃尾平野は、墓制をはじめとした様々な変化が確認される(石黒2009など)。

以上、筆者が直接的なかかわりをもって検討したことがある事例について概観した。筆者の研究テーマの関係から灌漑稲作導入期の事例に偏っているが、東北北部の後北C<sub>2</sub>・D式期の理解に参考となる。ちなみに、遠賀川系土器のように人の移住が関与する土器分布圏の拡大よりも、関与しない凹線紋系土器のような事例の方が、分布圏の拡大とかかわる他時期の文献(三輪1996など)を参照した限りでは一般的であったと推測される。遠賀川系土器は生業と密接にかかわっている所以であろうか。

移住者の数が在来集団に対して比率の低い事例では、灌漑稲作の導入という生業にかかわる明確な意図をもっていた場合でも、在来の土器への影響は限定的(南関東例)であり、ある程度の比率であっても同様(豊川流域例)、もしくは在来・外来の相互の関係性の中から新たな土器が生み出され(九州北部例)、移住者・外来系の土器がその地域の主流となることはない。外来の遠賀川系土器が主流となる山陰・大阪平野例では、少なくとも単独で集落を営むことが可能な人数の移住が確認される。

東北北部の後北C<sub>2</sub>・D式では、生業とは無関係の移住であることはほぼ間違いない。移住者



は移住先の東北北部の生業に従事するという、上記の事例とは逆の状況を呈する。また移住の目的・要因について検討を加えたが、現在主張されている考え方はいずれも問題点が明確であるが、それに替わる説を提示することはできなかった。明確な移住の目的・要因そのものが、当初から存在しなかった可能性も考慮すべきである。ちなみに移住者の比率は数%以下と低く、しかも移住者が存在した蓋然性は高いものの、確実とはいえない部分もある。それにもかかわらず、やがて外来系の後北 C<sub>2</sub>・D 式は東北北部の在り土器として定着し、その分布圏は拡大する。外来系の土器が定着しない前述の南関東や九州北部の事例との大きな違いは、移住者の故地との関係である。両事例では比較的疎遠であり、交流の方向性も移住者の故地から移住先への一方向が主流である。それに対し本事例では当該期から両者間の相互交流は活発化・顕在化する。後北 C<sub>2</sub>・D 式の東北北部での製作や北海道と共通する墓制には、数は少ないとはいうものの移住者や移住者との関係の深い人の関与が推定される(佐藤 印刷中b)が、移住は灌漑稲作にかかわる事例のように何らかの明確な目的をもったものではなく、日常的な地域間交流の一環として理解すべきものであろう。東北北部では当該期に大きな文化変容や変換が確認できないことも、その証左となる。そうした時に参考となるのは凹線紋系土器の広域波及である。遠賀川系土器の広域波及・分布圏の拡大は灌漑稲作の波及に付随する事象であるが、凹線紋系土器の広域波及・分布圏の拡大はそうした付随事象として理解されるものではない。土器そのものの生産体制・機能・用途が広域分布圏の形成と関連していた可能性があり、しかもその分布圏の拡大は地域間の交流の連鎖でなされた蓋然性が極めて高い。後北 C<sub>2</sub>・D 式の東北北部への波及・広域分布圏の形成も、この事例と同様に、ある意味では無目的に、いつの間にか自然となされたというような側面が強いと、理解するのが妥当である。東北北部の在り土器よりも、後北 C<sub>2</sub>・D 式の方が堅牢に作られている点などは、凹線紋系土器の煮沸効率の強化と同様に、外来系の土器が自然と受容された要因になる可能性がある。土器そのものに分布圏拡大の要因を探ろうとする視点である。またくり返しになるが僅かな移住者は、前述のように土器波及の前提となる地域間の相互交流を示すものの一つとして理解するということである。

ちなみに本項での稲作の波及とかかわる各地の土器相の検討は、古式土師器の東北北部への波及を検討するうえでも参考となる。

## おわりに

先行研究ではなされていない、土器の機能・用途を中心に当該期の様相を検討した。検討できる資料数が少ないという限界もあるため、「蓋然性がある」「可能性がある」という表現が多く、明確な結論を導き出すことはできなかったが、少なくとも新たな理解の方向性を示すことはできた。資料の増加も重要であるが、こうした新たな視点からの検討や、既存資料の再検討を多くの研究者が行うことにより、議論が活発化し、少しでも当該期の具体相が明らかになることが期待される。そのためにはまず、土器の分布圏の拡大が常に何らかの特別な事情を反映すると先験的に認識したり、土器の分布圏が常にいわゆる文化圏と一致すると先験的に認識したりする思考を排し、広い視野のもと真摯に資料と向き合うことが肝要であろう。また深澤(1994)のような精緻な分析が重要であることは、言うまでもない。

本論文の作成とかかわる資料調査では、しばらく前のものも含むが、各地の資料の所蔵機関・

関係者のお世話になりました。また青山博樹氏、秋山浩三氏、石川日出志氏、西川修一氏(五十音順)からご教示を得ました。感謝いたします。なお本研究はJSPS科研費JP20K01072の助成を受けたものです。

## 註

- 1) 柴田(2018)は最新の土器編年に基づき、岡山平野の当該事例の再検討を行っている。
- 2) 永井宏幸氏から土器にかかわるご教示をえた

## 参考文献

- 青森県教育委員会 2021『猪ノ鼻(1)遺跡』
- 秋山浩三 1995「各地域での弥生時代の始まり 吉備」『弥生文化の成立』角川書店 pp.141-151
- 石川日出志 2013「弥生時代の新潟県域」『弥生時代のいいた』新潟県立歴史博物館 pp.77-80
- 石川日出志 2021a「本格的農耕社会の形成とその意義」『米を作ると社会が変わる?中里遺跡の“弥生的”生活の始まり 発表要旨・資料集』小田原市教育委員会 pp.39-48
- 石川日出志 2021b「関東地方の水稲農耕の受容と中里遺跡」『日本考古学協会第87回総会研究発表要旨』pp.41
- 石黒立人 2009「凹線紋系土器期前後の伊勢湾岸域」『中部の弥生時代研究』同刊行委員会 pp.297-338
- 石黒立人 2014「型式と構造」『弥生土器研究の可能性を探る』2 石黒立人 pp.49-210
- 井上雅孝・早野浩三 2013「岩手県岩手郡滝沢村大釜館遺跡出土の宇田型甕について」『筑波大学・先史学・考古学研究』第24号 筑波大学考古学フォーラム pp.33-49
- 岩泉町教育委員会 2006『豊岡V遺跡』
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1987『親久保I・II・III・IV遺跡発掘調査報告書』
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002『長興寺I遺跡発掘調査報告書』
- 上野修一 1992「北海道における天王山式系土器について」『東北文化論のための先史学歴史学論集』加藤稔先生還暦記念会 pp.763-808
- 大阪府文化財センター 2009『讚良郡条里遺跡』VIII
- 太田圭・笠見智慧ほか 2019「レプリカ法による種子圧痕の調査—3ヵ年の調査成果概要報告—」『SEEDS CONTACT』6 設楽科研事務局 pp.7-11
- 片岡宏二 1999『弥生時代渡来人と土器・青銅器』雄山閣
- 神澤秀明・角田恒雄ほか 2021「佐賀県唐津市大友遺跡第5次調査出土弥生人骨の核DNA分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』第228集 pp.385-393
- 木村高 2011「東北地方の縄文文化 古墳文化並行期の北方文化」『講座日本の考古学』7 青木書店 pp.710-725
- 木村高・鈴木信 2011「古墳文化並行期の北方文化」『講座日本の考古学』7 青木書店 pp.710-758
- 札幌市教育委員会 1987『K135遺跡4丁目地点・5丁目地点』
- 佐藤由紀男 1999『縄文弥生移行期の土器と石器』雄山閣
- 佐藤由紀男 2000「甕・深鉢形土器の容量変化からみた縄文/弥生」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会 pp.1027-1061
- 佐藤由紀男 2004「遠賀川系土器と条痕紋系土器との関係性について」『考古学論及』第10号 立正大学考古学会 pp.15-24
- 佐藤由紀男 2020「北日本を中心とした弥生時代の物と人の移動について」『弥生時代の東西交流』六一書房 pp.269-275

## 東北部における後北 C<sub>2</sub>・D 式期の交流・移住・文化変容にかかわる検討

- 佐藤由紀男 印刷中 a 「弥生時代後期・終末期並行期の東北部の食生活と地域間交流」『東日本穀物栽培開始期の諸問題』雄山閣
- 佐藤由紀男 印刷中 b 「後北 C<sub>2</sub>・D 式期の東北部の様相及び北海道との関係性について」『高山流水－赤澤徳明氏退職記念論集－』同刊行会
- 佐藤由紀男・阿部理絵 2021 「湯舟沢式土器と赤穴式土器について」『昀 (MOMI)』第 10 号 弥生時代研究会 pp.101-110
- 佐藤由紀男・工藤美樹ほか 2018 「弥生時代後期・終末期並行期の東北部の食糧生産」『東日本における農耕文化の展開 要旨集』弘前大学・東京大学 pp.46-49
- 佐藤由紀男・工藤美樹ほか 2019 「東北部の弥生土器におけるレプリカ法調査の成果と展望」『SEEDS CONTACT』6 設楽科研事務局 pp.16-20
- 設楽博己・守屋亮ほか 2019 「日本列島における穀物栽培の起源を求めて」『農耕文化複合形成の考古学』上 雄山閣 pp.191-227
- 柴田将幹 2018 「縄文人と弥生人は共生したか」『実証の考古学』同志社大学考古学研究室 pp.107-118
- 下條信行 1995 「各地域での弥生時代の始まり 瀬戸内」『弥生文化の成立』角川書店 pp.131-140
- 庄田慎矢 2009 「朝鮮半島南部青銅器時代の編年」『考古学雑誌』第 93 巻第 1 号 日本考古学会 pp.1-31
- 杉山浩平 2014 「西の船・東の船団」『中華文明の考古学』同成社 pp.354-363
- 鈴木信 2011 「北海道の続縄文文化 古墳文化並行期の北方文化」『講座日本の考古学』7 青木書店 pp.726-758
- 高瀬克範 2014 「続縄文文化の資源・土地利用」『国立歴史民俗博物館研究報告』185 pp.15-61
- 滝沢規朗 2014 「続縄文土器と在地土器の並行関係」『古墳と続縄文文化』高志書院 pp.79-98
- 滝沢規朗 2015 「越後・佐渡における鉄器と青銅器」『古代文化』第 66 巻第 4 号 古代学協会 pp.22-43
- 滝沢村教育委員会 1986 『湯舟沢遺跡』
- 滝沢村埋蔵文化財センター 2008 『仏沢Ⅲ遺跡』
- 玉川文化財研究所 2015 『神奈川県小田原市中里遺跡発掘調査報告書』
- 豊橋市教育委員会 1993 『白石遺跡』
- 中塚武 2021 『酸素同位体比年輪年代法』同成社
- 中塚武・鎌谷かおるほか編 2021 『気候変動から読みなおす日本史 1, 新しい気候観と日本史の新たな可能性』臨川書店
- 中塚武・若林邦彦ほか編 2020 『気候変動から読みなおす日本史 3, 先史・古代の気候と社会変化』臨川書店
- 長友朋子 2021 「近畿地方の搬入土器からみた中里遺跡の集落形成」『南関東における農耕社会の出現／定着 発表要旨集』考古学研究会東京例会 pp.13-25
- 中橋孝博 2001 「大友遺跡第 5 次調査出土人骨」『佐賀県大友遺跡』九州大学大学院人文科学研究所考古学研究室 pp.60-67
- 中橋孝博 2003 「大友遺跡第 6 次調査出土人骨」『佐賀県大友遺跡Ⅱ』九州大学大学院人文科学研究所考古学研究室 pp.50-63
- 信里芳紀 2014 「凹線土器の研究」『弥生土器研究の可能性を探る』2 石黒立人 pp.1-20
- 信里芳紀 2021 「農耕社会のはじまりと遠賀川式土器」『近畿最初の弥生人』大阪府立弥生文化博物館 pp.76-93
- 端野晋平 2010 「近年の無文土器研究からみた弥生早期」『季刊考古学』第 113 号 雄山閣 pp.31-34
- 端野晋平 2018 『初期稲作文化と渡来人』すいれん舎
- 花井正香 2002 「薬師社脇遺跡」『岩手考古学会第 28 回研究大会発表要旨』pp.18-20
- 濱田竜彦 2019 「中国地方におけるイネ科穀物栽培の受容・試行・定着」『農耕文化複合形成の考古学』上 雄山

佐藤 由紀男

関 pp.141-160

- 濱田竜彦2021「共存にはじまる山陰の弥生時代」『島根県古代文化センター研究論集』第25集pp.209-220
- 深澤芳樹1994「尾張における凹線紋出現の経緯」『朝日遺跡』V 愛知県埋蔵文化財センター pp.273-288
- 藤沢敦2014「古墳文化と縄文文化の相互関係」『古墳と縄文文化』高志書院pp.9-28
- 前田義人・武末純一1994「北九州市貫川遺跡の縄文晩期の石庖丁」『九州文化史研究所紀要』39 pp.65-90
- 三輪晃三1996「九州阿高式系・緑帯文系土器群の研究」『奈良大学大学院研究年報』1号 pp.50-94
- 森岡秀人1993「初期稲作志向モデル論序説」『考古学論叢』関西大学 pp.25-53
- 家根祥多1984「縄文土器から弥生土器へ」『縄文から弥生へ』帝塚山大学考古学研究所 pp.49-78
- 家根祥多1993「遠賀川式土器の成立をめぐる」『論苑考古学』天山舎 pp.267-329
- 山下優介・太田圭ほか2017「2016年度のレプリカ法による種子圧痕の調査」『SEEDS CONTACT』4 設楽科研事務局 pp.14-16
- 若林邦彦2002「河内湖周辺における初期弥生集落の変遷モデル」『環瀬戸内海の考古学』上巻 古代吉備研究会 pp.225-239